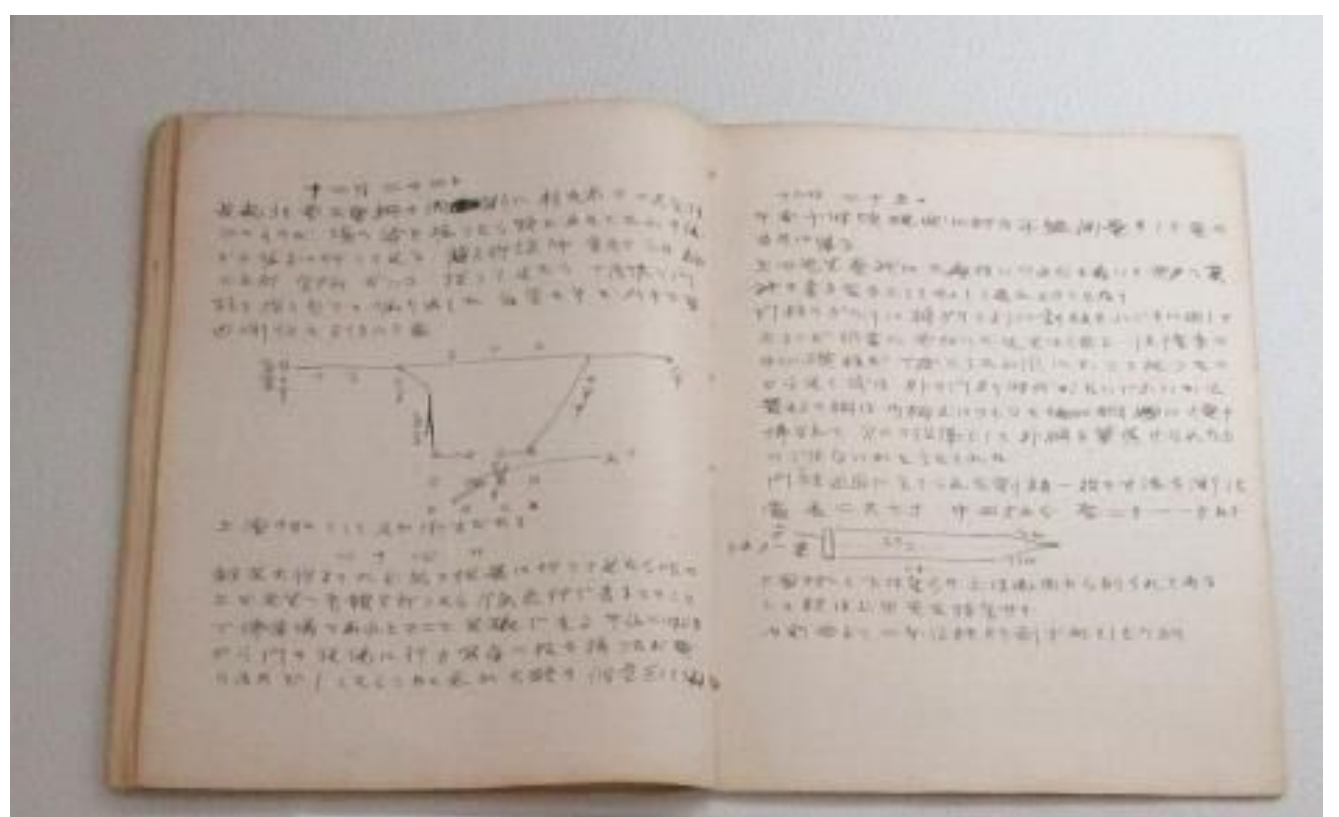
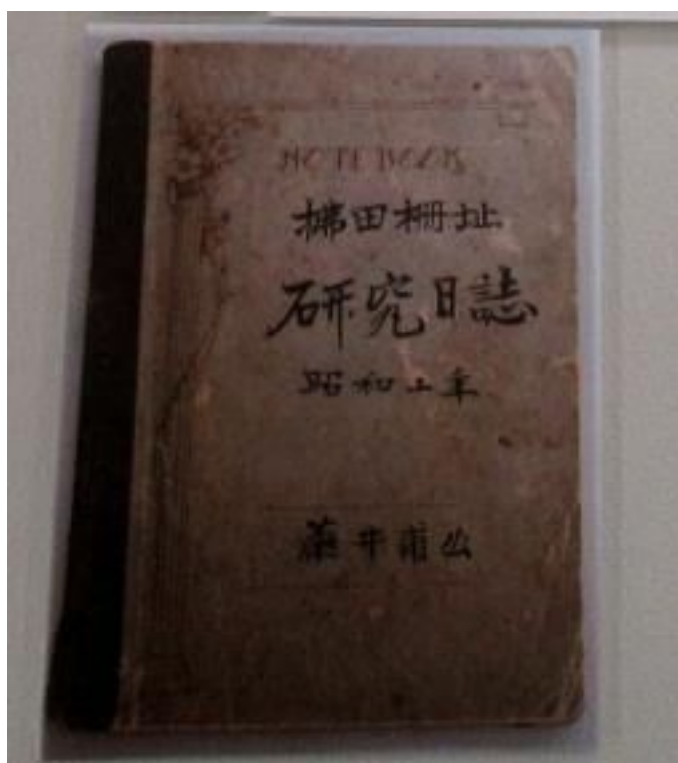


ごとうちゅうがい
後藤宙外 (1867 - 1938、払田村生)

後藤宙外（本名：後藤寅之助）は、現在の大仙市払田田ノ尻に生まれた。東京専門学校（現早稲田大学）を卒業し、作家・編集者として明治文壇で活躍。

大正3（1914）年に秋田時事新報の社長として秋田に戻ると、翌年に六郷町へ引き移った。大正8（1919）年から2期8年六郷町長を勤め、その間に資料を収集して町村史編さんに取り組み、それを機に携わった払田柵跡の発掘調査において主導的役割を担った。



拂田柵址研究日誌（大仙市指定文化財）

池田家払田分家の支配人であった藤井東一が、調査主任として従事した払田柵跡の発掘調査について書いた自筆の日誌。日誌表紙に書かれている甫公は藤井東一の号。（市所蔵）



松井某宛 後藤宙外書簡（秋田県立博物館寄託資料）

昭和 6 年に山形県飽海郡で発見された本楯柵跡（現在の城輪柵跡）について、払田柵跡の方が一年先に発見された点、三重柵で規模が大きい点などを挙げて払田柵跡の価値の高さを訴えた後藤宙外の書簡。後藤の手元に残っていることから、下書きあるいは控えか。松井先生は不明。（個人所有）



高梨村会々議録（昭和 5 年）

昭和 5 年に試掘及び文部省の発掘が行われ、各地からの見学者が増えていることから、高梨村会において払田柵跡の道路改修費を計上している。（仙北町役場文書）

文部省調査 昭和5年に後藤宙外によって^{ほったのさくあと} 弘田柵跡の試掘調査が開始し、同年に文部省嘱託・上田三平による文部省調査が実施された。上田は池田家本邸を宿所とし、池田家弘田分家を拠点にして発掘調査を進めた。

試掘段階から弘田柵跡は三重柵であることが確認され、後藤や池田家弘田分家の支配人であった藤井東一が調査主任として協力し、文部省調査の研究成果により昭和6年3月に国指定史跡として保存されることとなった。



弘田柵跡の発掘調査現場にて

払田柵跡関連年表

年代	高梨村関連	後藤宙外関連
慶応		
		慶応2年12月22日(1867年1月27日)、仙北郡払田村(現大仙市)に生まれる
明治		
22年(1889)	市制町村制施行により5ヶ村合併の高梨村誕生、初代村長は池田甚之助	
27年(1894)		東京専門学校(現早稲田大学)を卒業(27歳)
28年(1895)		小説『ありのすさび』を発表
30年(1897)		雑誌『新著月刊』の編集に参加
33年(1900)		雑誌『新小説』の編集主任
34年(1901)	池田文太郎が第2代村長に就任	
35年(1902)	千屋村の坂本理一郎が約200の柵木を発見	
36年(1903)		
39年(1906)	高梨村耕地整理事業開始 水田の底部から埋もれ木が発見される	
大正		
3年(1914)		秋田時事新報の社長として招かれ、秋田に帰郷(47歳)
4年(1915)		秋田時事新報を辞めて六郷に隠退
8年(1919)		六郷町長を務める(52歳)
		郷土資料を収集する
昭和		
2年(1927)	池田文一郎が第3代村長になる	『六郷町郷土史一斑』を編さん
3年(1928)		高梨村郷土沿革史編さん事業に取り組み始める(61歳)
4年(1929)	池田文太郎銅像を建てる	払田柵跡の調査を開始し、岩手からの研究者を案内 「仙北郡高梨村払田柵址略図」作成開始(~5年)
5年(1930)		高梨村郷土沿革史編さん事業の一環として発掘調査を実施 池田家払田分家支配人の藤井東一を調査主任に従事させる (発掘の経過や分析を日誌としてノートに記す 展示資料)
6年(1931)	3月に払田柵跡が国の史跡に指定される 「払田柵址保存会」が結成される 澄宮殿下(すみのみや、三笠宮崇仁親王)が来られる	澄宮殿下を払田柵跡へ案内する 山形県飽海郡で発見された本楯柵跡(現在の城輪柵跡)を見学する
7年(1932)		払田柵跡と本楯柵跡を比較し論じた書簡を書く(展示資料)
8年(1933)	東伏見宮妃殿下が来られる	東伏見宮妃殿下を払田柵跡へ案内する
11年(1936)		『明治文壇回顧録』を出版
13年(1938)		福島県猪苗代で死去(71歳)
15年(1940)	『高梨村郷土沿革紀』刊行	

(年齢は満年齢)